We 25R

No.250　03/09/18

あと３日

台風が過ぎてからはめっきり湿度が下がったせいか、朝晩は秋の雰囲気がただよい始めた。うっかりタオルケット一枚で寝ていたりすると、明け方になってから寒い思いをすることになりそうだし、寒い思いだけで済むならイイが、せっかくの星陵祭を前にして体調を崩したりしかねないので、自分自身の生活の管理には十分に注意しよう。

＊

ところで、昨日の放課後、ちょっとだけ練習を覗いてみたら、●●が床に横たわり、●●が台本に目を近づけ、●は絶叫し、●●はニコニコし、●●はドギマギし、●●は台詞が入っている部分はそれらしく演じ、●●はやはり●●さん…という感じであった。う～む…と思ったが、まあここは大演出家●●に任せることにして気楽に観劇していたが、台本そのものはなかなか面白くできているようで、結構笑えた。

しかし、とにかく役者諸君はその面白い台本をしっかり頭に叩き込むことである。台詞があって初めて演技が成り立つのだから、その台詞を台本で探しながら演じているようでは、演じていることにはならない。ここは一つ世界史の小テストのつもりで？、とにかく（自分の台詞だけでなくすべての台詞を覚えるつもりで）台本を頭に入れよう。

ついでに「演じる」ということだが、前に深津絵里さんの記事を引用して、

> 舞台「キル」の稽古場で野田に言われた。「悲しいときに泣かない。涙を流すときは、下ではなく上を向く。そうすることで、本当の悲しみが伝わることもある」

という部分を紹介したが、これはやっぱりプロだから言えることであって、素人の私たちは、「演じる」時はしっかりそれらしく「演じる」方がよいのではないかと思う。自然体で演じたいという部分があるのかも知れないが、観客は演劇を見に来ているのであって、何も自然な姿を見に来ているわけではない。その役になりきって、先ずは「いかにも刑事」「いかにも泥棒」といったステレオタイプの雰囲気を醸しだし、その上で、それぞれの個性が表れるようにするとイイのではないか。

舞台での発声も、合唱と同じで、ヒソヒソ話だからといってヒソヒソ発声していてはいけない。大きな声を出しながら、演技で小さな声を出しているように見せるのが大切なのである。いや、ヒソヒソ話を「演じて」いるのだから、別に大きなヒソヒソ話であっても構わないし、むしろその方が雰囲気が出たりするのである。掛け合いが面白い台本だから、間髪を入れずやりとりしたり、ちょっとタメをつくってリズムを出したりと、役者諸君の表情豊かな演技に期待したい。

練習では台詞を言っている人に注目が行きがちだが、同じ舞台の上にいて、その瞬間に台詞がない人の動きにも注意が必要である。「動き」と書いたが、基本は「動かない」だろう。体をゆらしたり手が落ち着かなかったりすると、結構気になるものだ。視線も台詞を言っている人に向けるのが基本。その基本があるから、そっぽを向いていると、例えば「何か悪巧みしているな…」みたいな雰囲気が生まれてくるのである。

あと３日だ、イイ劇に仕上げよう。